

彙報

木簡学会設立総会および研究集会記事

かねて設立の準備がすすめられていた、木簡研究の新たな学会組織である木簡学会の設立総会と記念講演および研究集会は、奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館で左記の如く行なわれた。

◇三月三十一日(土) 午後一時三〇分から

設立総会 準備委員代表岸俊男氏の挨拶ののち、弥永貞三氏を議長に選出し、左記の如く行なわれた。

経過報告(田中稔) 一九七七年二月の奈良国立文化財研究所主催による第三回木簡研究集会の終了後、参加者の一部から新たな木簡研究の学会組織を設立する旨の提案がなされ、参加者全員によって準備委員が選出された。そこで奈良近辺の準備委員を中心に、当日出された参加者の意見や、諸般の事情を検討して、原案を作成し、準備委員全体の意見を求めるなどしてようやく設立総会をもつところまで来た。幸いローウェ博士の来日を機会に設立総会を計画しては、との意見もあり、急拠日程などが定まったため、必ずしも準備委員全体の意見を十分に纏めるゆとりもなく、岸・田中・狩野など奈良近辺の準備委員が独走した感のある点は深くお詫びしたい。やはり奈良近辺に職場をもつ数人で事務局を構成し、ここでも検討を重ね、午前

中に準備委員会を開催して、会則案等を審議し、現在にいたった。なお、右のような事情もあって、本日の設立総会等の案内は、先の三回にわたる木簡研究会への参加者に限ったことも了解していただきたい。

会則提案(狩野久) 会則案を検討の結果、原案が可決された。

逐条審議がなされ、部分的な修正意見も出されたが、とくに運用する過程で実情に応じて検討を加えることとなった。とくに第五条についてはその運用にあたっては会の主旨を十分に体するべきで、例えば会員と会誌購読者とを区別する点については委員会で検討することとなった。また第六条については顧問をおくべきであるとの意見が出されたが、必要と認められる段階までは設けずに、論議のあったことを記録にとどめることとなった。さらに第八条の総会の内容や会の運営方法等については委員会でも検討し、必要があれば第一条にもつき細則等で定めることとなった。

会費提案(狩野久) 初年度で予算の積算基準が明確ではないが、総会開催費・会誌刊行費・その他の雑費で概算八〇万円は必要であり、これを会費によって賄うという原則から、一人一万円とする案が提出され、承認された。

委員および監事の選出(田中稔) 別掲の如く提案され、承認された。

記念講演 ケンブリッジ大学東洋学部のマイケル・ローウェ博士

が、「中国新出土の木簡と帛書」と題して講演された。その要旨は別掲の如くである。

懇親会 記念講演終了後、午後六時から、「ガーデン大和」で行なわれ、親睦を深めた。

◇四月一日(日) 午前九時三〇分から午後三時まで、左記の研究発表が行なわれた。いずれも報告内容は本号に収載できたので、本誌の所収論考を参照されたい。

最近の各地遺跡出土の木簡

加藤 優氏・八木勝行氏

秋田城跡出土の木簡

平川 南氏・小松正夫氏

藤原宮跡出土の木簡

鬼頭清明氏

(司会) 直木孝次郎氏・北村文治氏

討論では、加藤報告を補足して御子ヶ谷遺跡について八木勝行氏の報告があり、長岡京・大宰府・長門国府遺跡などからの出土木簡についても補足報告があり、ついで秋田城跡・御子ヶ谷遺跡・藤原宮跡の順序で、とくに木簡出土遺構を中心とした事実関係について活発に論議が行なわれ、三時すぎに終了した。

第一回委員会(四月一日)

研究集会終了後、第一回委員会が開催され、会長に岸俊男氏を選出し、幹事(二名)を委嘱した。また、次回の総会を二月一・二日(土・日)に開催し、それまでに会誌(創刊号)を発行する事とした。

役 員

会 長 岸 俊男

副会長 大庭 脩

委 員 青木 和夫

門脇 禎二

田中 琢

坪井 清足

早川 庄八

監 事 関 晃

土田 直鎮

幹 事 佐藤 宗諄(編集)

栄原永遠男

岩本 次郎

今泉 隆雄

鬼頭 清明(庶務)

東野 治之

加藤 優

清田 善樹

平野 邦雄

岡崎 敬

狩野 久

田中 稔

直木孝次郎

原 秀三郎

和田 直鎮

和田 章

町田 章

綾村 宏

佐藤 信